

国際コミュニケーション学科奨学金授与式に際して

私の気まぐれな奨学基金の設立の申し出を受けて、今日、第1回目の国際コミュニケーション学科奨学金授与式として結実したこと、本当に嬉しく思います。規定の作成から始まり、学生部、総務部などとの折衝、そして受給者の選定など、学科の教員の皆さんや事務職の方々に、深く感謝申し上げます。

さて、私は去年の3月末をもって沖縄大学を去りましたので、知らない学生の方も多と思いますので、ごく簡単に自己紹介させていただきます。私は、1988年4月に沖縄大学短大部英語科に赴任し、その後1999年に短大部を改組して国際コミュニケーション学科を設置する際には中心的な業務を担いました。ですから、退職まで33年間沖縄大学に勤めたこととなりますが、やはり国際コムという学科、そして学科の学生諸君には思い入れが深いのです。そして、大学を去るに当たっての懸念の一つは、国際コムの学生の学内奨学金の受給率の低さでした。他学科に負けているという悔しい思いをずっと抱えていました。そこで、思いついたのが学科独自の奨学金ができないものかということでした。それを酒を飲んだ勢いで伊藤先生に電話で相談したところ、奨学基金の設置に向けて動いてくれるということになったのです。昨年中に実現したかったのですが、私が認知症の母が気がかりで、高校時代を過ごした盛岡に引越し、さらに母を仙台から盛岡の老人ホームに入居させるために忙しかったこともあり、伊藤先生にきちんと連絡を取らなかったため、今年度になってしまいました。

ともあれ、繰り返しになりますが、学科独自の奨学金ができて本当に良かったと思います。

受給者の皆さんから送られてきた礼状は、繰り返し読みました。4年生のお二人は進むべき道が定まったようで、喜ばしいことです。あと4ヶ月で卒業ですが、実社会でも頑張ってもらいたいと願っています。他の方々も、真摯に学業やサークル活動、あるいは学外の活動に取り組んでいる様子がよく分かるような文章を送って下さいました。新型コロナの影響で厳しい学習環境の中、よく頑張っていると感じました。今回、授与できる奨学金は一人当たりになると10万円で、雀の涙かもしれませんが、学業や自分の道を進むための一助にしてもらえれば幸いです。

最後に、老人の繰り返言ですが、一言だけ言わせて下さい。それは、勉強に限らず、サークル・クラブ活動であれ、友人関係であれ、アルバイトであれ、社会に出てからの仕事であれ、目の前のやらなければならないことには全力で取り組むということです。70年近く生きてきて、これだけは言えます。とにかく、何であれ一所懸命にやったことは、すぐにはなくても、いつかは役に立ちます。生きていく中で、どこかで自分を救ってくれます。嫌々やったことは、身に付きません。

皆さんのこれからの人生、学生生活に幸あれ、と祈って、結びの言葉に致します。

雪の降りしきる盛岡にて

木村英紀